

手をあげて立つ銅像に囀れる
才人の出でずとなげく虚子忌かな
染卵ちらと画才の見られけり
風紋におちこちすなる凧の影
山越えのひとかたまりの遍路かな
ぬかるみをものかは雨の牡丹見る
石庭に向きて筆とる夏書かな
雨期の衣を干して難民街の窓
蠅止まる今踏まれたるさくらんぼ
吊橋や螢火襖なすところ
袂這ふ螢飛ぶこと知らぬげに
雨水のはけぬ畝間に苺浮く
旗立てゝをらぬ畑の苺摘む

縞裂けし日覆の夜も巻かれずに
耳鳴りの虻かと思ふ泉かな
亭涼し閉店の椅子たゝまるる
亭涼し落ちし提灯吊りもせず
D A I M A R Uとよめて涼しき灯の異国
片蔭の翼張りたる総督府
砂日傘卓ころがして倒れけり
ポスターの女は裸星の竹
花火の尾星吊り下げて消えにけり
母に聞く寝物語や震災忌

二〇一八年四月二四日